平成27年1月1日現在	
総世帯数	1,463世帯
総人口	2,740人
男	1,272人
女	1,468人

第二地区ウォーキング大会

私の町を再発見

去る十月九日、第二地区のウォーキングが行われました。

平均年齢やや高めの総勢五十一名、体のあちこちをゴキゴキ鳴らしながら準備運動をしたあとは公民館を元気にスタート。

時は秋、さわやかな青空と真っ盛りの美しい紅葉を満喫しつつ、顔見知りも初対面同士も互いに打解けておしゃべりしながら進みます。

車通りの少ない路地を選びながら、竹平町、錦町、常盤町、相生町と「旧町名碑」をたどり、碑に彫られた由来を学んでは「フーン」「へエェ」とわかったつもり。長く住んでいても案外知らないことがあるものです。

緑橋、天神小路と進むうちに、本日のウォーキングの目玉、まつもと芸術館に到着です。芸術館がオープンしてちょうど十年。様々な意見を集約して建設されたこの施設は、その運営も含めて、今では松本の誇りです。

舞台装置全般を担当されている坂口さんの案内で、まずは三階のオープンスタジオへ。公演間近な『K・テンペスト』の練習場所となっていて、衣装やら小道具やらが置いてあり臨場感満載です。北側の全面ガラスの向こうには、山並みを背景に緑の芝生が鮮やかに広がっています。かつてのライラック公園の面影を残した屋上庭園です。

大型バスやトラックが何台もすっぽりと入ってしまうステージ裏の巨大な搬入口。その一角には、なんと災害時のための食料や毛布が備蓄されていました。芸術館は、第二地区の避難場所にもなっているのでした。

ステージに案内され、体育館ほどもある巨大な空間にびっくり。客席から見るステージは、ほんの一部でしかありません。ステージからは客席が意外と近く見えるのも驚きでした。

深志神社から長沢町、栄町とたどって公民館帰着。

ひっそりとさりげなく佇んでいる旧町名碑を見ながら、先人たちの暮らしの営みが思い起こされて、この町で現在を生きている私たちの暮らしもまた、いとおしく思えてくるのでした。

善光寺所感

梅ヶ枝町　町会長　降籏　勝一

牛に引かれて善光寺参りと言う言葉があります。善光寺では毎日午前十時から午後三時まで鐘が鳴ります。鐘をつくのは本堂に交代でつとめている〝堂番〟という職員さんで、鐘の音は近所の町まで聞こえ門前町の風情ある日常の音として親しまれています。

多数の参詣者がいるので、社会的な弱者も集まって来ます。戦乱・飢饉の結果として捨て子も多く、かれらは「寺子」として生きて江戸時代の身分制度の下で一般の共同体から排除されていました。かつて境内には昭和二十六年～四十三年迄ホンモノの牛が飼われていて参詣者を和ませていたとの事、インドからやって来て亡くなった後は雲上殿にまつられているそうです。

畦友会

覚めやらぬ不思議な夢や霜の花　荒井美津子
冬の昼友に電話のはろばろと　伊藤　雅子
年賀状書きつつ想ひ走馬灯　鎌田　哲也
夜もすがら虎落笛聞く浅眠り　川上みよ子
冬桜淡き恋など忘れ去り　小林せつ子
今と言う刻をつなぎて年の際　鈴木恵美子
落葉踏む足裏の温み総身に　須田奈津子
空っ風人を震わせ走り去る　祖父江律子
冴ゆる夜の星に粉れる夜間飛行　手塚　洋子
微酔の身に降り注ぐ寒月光　中野恵次郎
柿たわわ遍路の列に色そえる　吉澤　道子
積年の筆の師友と別つ冬　吉島　節子

お雛様の季節に想う

南源地町会　三村　修子
（ベラミ人形店）

立春が待ち遠しい一月中旬より、近くの高砂通りには上巳（じょうみ）の節句に飾るお雛様をお探しと思しきご家族連れの方々が多くいらっしゃって、街のにぎわいになっています。我が家にもその時期には松本押絵雛のお雛様をお求めになられるお客様がいらっしゃいます。？と思われた方もおいでかと思いますが、「オシエビナというからには三月のお雛様でしょ」とよく言われます。ところが、「雛」を辞書で引くと鳥の子とか、小さい、愛らしい意を表すとありますので、小さい、愛らしいヒトガタ、つまり雛人形となるわけです。ですから、松本押絵雛には端午の節句人形や歌舞伎もの、昔の世俗の人形など当時の様子がつたわる品々がたくさんあり、現在ではお部屋の飾りや記念品等としても使われます。

松本市立博物館発行の本によりますと、押絵をいつ頃誰が作り始めたかは不明ですが、江戸後期にはその存在が確認でき、幕末から明治初め頃は士族の妻女達が収入を得るために内職で作るようになって、その後次第に町屋の人々も作るようになったようです。押絵は天保年間にはすでに松本の特産品となっており、明治十五年前後からは分業が進んで量産が始まり明治中期には最も盛んで、年間生産額が当時のお金で五万円にものぼる松本の一大産業になりました。

昔に思いをはせながら我が家にある古い押絵雛を見ると、当時の人達が分業によって仲間と協力しながら仕事をしていた様子が目に浮かび、そのことが結果的に地域の力にもなり維新前後の大変な時代を乗り越えるひとつの例だったように感じます。転じて現代の私達も、近い将来より良い地域となることを願って、公民館や町会等様々な活動を通し大勢の方々と共に分かち合い協力させていただければと思っております。

※上巳の節句＝桃の節句

「小さな声」が皆の楽しみに

小町会の公民館活動紹介
天神南小池町町会　公民館長　中野　勝由

公民館長を前任者の都合で急遽引継ぎ二年になります。当初は、公民館長としての仕事は全く知りませんでした。公民館長新人研修に参加し、文化・体育・学習活動の場を設け、円滑な人間関係を育成して行くことが、主な仕事になると教えて頂きました。

私どもの町会は、三十数世帯の小町会であり、かつ、高齢化が進んでおり、活動は親睦会等が主体となっておりました。

確かに、小町会が主催する文化・体育活動に講師を招いてのサークル活動は、参加人数等から実施が難しく、個人的に第二地区公民館等の活動に参加するようお願いしています。

そんな中、地区文化祭への出品をお願いに伺った折に、多くの人が趣味を持ち、各所開催の趣味講座等に積極的に参加し有意義な時間を過ごされていることを知りました。また、出品作品をお返しに伺った折に「大勢がご覧になり感心されていましたよ」とお伝えした時に、本当に嬉しそうな仕草が見られました。

そこで、今年は、精魂込めた作品を日の当たる場に出し、見てもらう喜びを次に繋げてもらうことを主眼に、出展をお願いしました。

何と、予想以上に七人の方から出品がありました。

また、ある時、女性の方からボウリングをやりたいとの「囁き」がありました。

当町会は、後期高齢者集団でありボウリングは無理だろうと勝手に思っていました。

しかし、この声を基に、町会初のボウリング大会を十一月に開催してみました。

参加者は十数人、女性の参加者の方が多く平均年齢は七十数歳でした。

大会では、ガーターの連続、たまにスペアーやストライクが出ると、全員が自分のことのように喜び、万歳やハイタッチをしたりしてワイワイガヤガヤのゲームでした。

大会後に参加者のほぼ全員から「楽しかった・またやりたい」の言葉がありました。

これらから、小町会の公民館活動にヒントを得ました。「楽しかった、嬉しかった」の気持ちが、大勢の楽しみに繋がって行くことを。

小町会であっても、小さな声に耳を傾け大切にした活動をしたいと思っています。

すすき川

明けましておめでとうございます。良い年を迎えた事と思います。今年は未年ということで、内面は我慢強いようです。

昨年は全国的に自然災害が多く、我が長野県でも、木曽での土石流災害、御嶽山の噴火、神城断層地震が発生し、多くの人達が被害を受けました。年を追う毎に自然災害の発生する回数、規模が大きくなり、身に迫る危機は否めないと感じます。

今年は戦後70年、私も50年余のサラリーマン生活の中で、高度成長時代、オイルショック、バブルの崩壊、企業のリストラ、リーマンショック、デフレ経済等、世の中のあわただしさに翻弄され70余歳となり、流れに添ったようにしか仕方がないのかと思う今日この頃です。

時代の変化と共に、過疎化、少子高齢化、高齢者の一人暮らしも増え、町会運営のむずかしさ、挙げれば明日は不安ばかりです。そんな暗い、つらい話しばかりでなく、今年は未年、我慢強く生きましょう。

今年は「雨のち、ハレルヤ！」

（佐藤）